障害児の親の声をきいて

――加茂川ハル子さんが語る

編集部

加茂川さんは、教員時代の後半十八年を入れて障害児・者問題に三十年近く情熱を注いでいます。

昨年の一月「新潟日報」（中越版）が「街に人あり」のコラムで加茂川さんの活動を五回にわたり紹介しました。そこに「三十六年間働き通した退職金で手に入れた七十五平方メートルの小さなホール」とある場所を訪問し、お聞きしました。

（編集部）

これは、幼稚園の教室みたいですね？

みんなが集まれる場所をつくったの。教員のとき、子どもたち（担任した障害児）が私の家へ来ては米びつをいたずらして米の山はつくる、障子は破る、家中のスイッチを入れるで、すごかった。自由にさせてやれる場所を作りたかったし、親たちも子づれできて心おきなく話せる場が必要だなと思ったからです。

いまはここで、「あさがお会」の人やその子どもたちが使うの。それは、十年前にできた障害児と親とボランティアの会で、約四十組のメンバー。

あさがおのつるのようにからまりあい助けあっていこうという願いをこめて親たちがつけた名前。「あさがお」という通信を出していて、まもなく千号になるの。

週一回くらいは数人が、あちこちから来てしゃべっていくの、入広瀬や加茂市からも。経験や情報の交換です、わたしはそのお手伝い。その時、子どもたちはここで大喜びで遊ぶの。情緒障害の子がパニックを起こしても危険のないように、このガラス戸は特別製。おもちゃも机も、こわされていいようにみんな、もらい物やお古。

障害児の親の切実な願いは、なんですか？

子どもが大きくならなければいいと言うの。小学校入学通知がくるとドキ

ッとしたというの。みなさんは、この言葉をどう受け取りますか。

健常児だと、すっと地元の小学校へ入れるのに、障害があると何回も教育委員会に呼び出され、養護学校か特殊学級に入れと言われる。長岡では、やっと今年養護学校が開校したけど。これ迄は三条の月か岡養護学校へやらなければならないし地元に特殊学級がなければ他学区の特殊のある学校へ通学しなければならない。勤めは殆どやめなければなりませんね。送り迎えのために。七九年からの養護学校の義務制は素晴らしいことです。でもまだ問題は山積。その一つに就学指導委員会があげられます。私もその委員になったことがあるけど。子どもの就学先は重要な問題。時間をかけて納得のいく情報を得て親たちは選びたいのに、そういう仕組みにはなっていない。障害児保育もこの辺ではまだ経験や研究も少ないし。

判定する具体的な仕組みは？

大体市町村学校の特殊学級の先生が二人でテストや面接をする。このテストが問題。はじめての場所、はじめての先生に障害を持った子が日頃の力を出せるはずがない。

眠たくなってぐずったり、パニックを起こしたり。その資料が委員会で報告。その子どもを見ていない他の委員は発言しにくい。その結論を親に納得させようとするわけ。親はそれに従わざるをえないようになりがちね。

特殊学級の先生の問題もあるでしょう？

そうです。ベテランといわれる人も自分の児童や生徒をバカにしている例がある。「あなたの子は、この子たちよりいいでしょう」なんて他の親に言うの。

また、普通学級の担任で問題のあった人が配置されたり、年令にこだわるわけでないけど定年まじかの意欲のない人だったり。親も子どもも文句をいわないからという、障害児を馬鹿にしたあつかいと思います。

特殊学級の教育内容の問題は？

問題が多い。例えば中学校の作業学習。ボルトにナットを付けさせる単調な仕事を延々、黙々とやらせるのなど。見学した「あさがお」の親たちは「暗いね、こんな学級には入れたくない」と。かなり自由に授業が組めるのだから、工夫して欲しい。たとえばこんな実践。耕すグループ、雑草ぬきグループ、したくないグループに希望をとって作業をしたら、やがてしたくないグループの子どもも耕したり、草とりしたりになった。子どもの意欲をひき出し意思を尊重した教育実践をしてほしいの。

ある学校では一日中トランプをやらせていたとか半日で帰宅させたとか。展覧会の作品は、先生の手が加わって

いて、子も親もちっとも喜びが無いとか。うまくない字や絵が恥ずかしいという考えが問題ね。

養護学校はどうでしょうか。

養護学校は施設もよく教員数も多く障害に配慮した教育が一般的には受けられる学校です。新潟県の県立養護学校は寄宿舎つきで駅より遠い所にあり一般の子どもたちとの交流は弱くなりがち。その点市立養護はスクールバスで家から通学でき地域や家族の中で暮らすことができていいですね。生活訓練を重視して障害児を早くから寄宿舎や施設に入れることを進める考えもありますが、そのことが子どもの本当の自立につながるか疑問を持っています。

交流教育は大切なのでしょう?

欠かせないものと思います。障害児、障害のない子ともに必要だと思います。両者のふれあいや協同の活動等から他人へのいたわり、やさしさが育てられる。それを阻んでいるのは能率優先の教育観でしょう。長岡近辺のある校長は公然と、「言葉がなければ人とかかわったことにならない」から「N君の交流はマイナス」とまでいっています。また別の校長は「普通の子どもは、障害児と遊んでくれとなると負担になる」とか「勉強に集中すれば、他の子にまで手はだせない」などと迷惑論をのべています。

親たちの運動が弱いところは迷惑論が通るのでしょうか?

経験からそういえます。次のは先の校長への親たちの要望書です。一、月一回の割合で学級懇談会を開いて下さい。校長先生との懇談会を学期に一回開いて下さい。二、子供たちの社会性と普通学級の障害児に対する心を伸ばすために教科の交流をすすめて下さい。三、休憩時間に他の子供たちと交流できるように普通学級と同じ遊具を使わせて下さい。四、特殊学級の児童に対する見方をかえて下さい（特殊学級の先生、普通学級の子供達）。

大体受け入れられたそうですが、親が声を上げなければ少しもよくならない現実があります。特殊学級設置校でも特殊教育に対する学習がされていない校長・担任が多いのは驚きです。何でも教育委員会におうかがいをたてる、自主性のない校長、反対に自分の意見を我無しゃらに通す校長、いずれも親たちがあきれています。『教育情報』もよく特集しましたね。期待します。

（かもがわはるこ・長岡市・「あさがお会」）